主に依って一つとなり
十字架の栄光に従う

ヨハネ17章20～26節
2021年3月21日
松田 基子 師

受難節第5主日を迎えました。 来週は受難週です。 イエス様は父なる神様の御手で、動かされている、その時を知っておられました。
イエス様は人類の贖いのため、十字架に架かることを覚悟して、過越祭が行われるエルサレムに来ておられました。 ヨハネ12章27節で、その決意を語っておられます。

「今、わたしは心騒ぐ。 何と言おうか。
『父よ、わたしをこの時から救って下さい』と言おうか。 しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。 父よ、御名の栄光を現してください。」
「すると、天から声が聞こえた。
『わたしは既に、栄光を現した。 再び栄光を現そう。』」

とあります。

イエス様は御自身に与えられた、人類救済のための、十字架による贖いに向かって、そこに神様の栄光が現されることをご存知で、前に向かって進まれました。 弟子たちとの過越の食事は最後の晩餐となりました。 イエス様だけが、これから御自身の身に起こってくる、捕縛、裁判、十字架に依る処刑、埋葬、復活、弟子たちとの再会、御自身の昇天、聖霊降臨が、父なる神様の御手で行われて行くことをご存知でした。

しかし、弟子たちは、その事を知りません。
イエス様は、弟子たちが御自身の十字架に直面した時の、その衝撃、不安、動揺を案じられましたが、一番大切な事として、14章1節で、

「心を騒がせるな。 神を信じなさい。
そして、わたしをも信じなさい。」

とお命じになりました。 また、何よりも、御自身が天に帰られたならば、弁護者である聖霊を送る事を約束されました。

16章12節で、

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。 しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。
その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなた方に告げるからである。 その方はわたしに栄光を与える。 わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

と、聖霊の助けの確かさを約束して下さり、
16章33節で、

「あなたがたには世で苦難がある。 しかし、勇気を出しなさい。 わたしは既に世に勝っている。」と

励まして、弟子たちへの言葉を終えられました。

すると、17章1節で、

「イエスは、これらのことを話してから、天を仰いで言われた。
『父よ、時がきました。 あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えて下さい。』」

と祈られました。 17 章はイエス様の祈りが記されています。 イエス様は神の御子であられ、神様の栄光をこの世に現すために人の世に、生まれて来られましたが、それは具体的には、何だったでしょうか、 2節から、

「あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。 そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。」

と、イエス様は御自身の使命が、永遠の命を与える事にあることを言い表しておられます。

そして3節に、

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」

と言われました。 イエス様のこの言葉を聞かれて、物足りなさを覚える方が居られるかも知れません。 なぜなら、

「永遠の命」

と言う言葉から、
『永遠に死ぬ事が無い』
と考えておられる方もおられるでしょう。 しかし、考えて下さい。
『ただ、死なない』
と言うことに、生きる意味や価値があるでしょうか。命とは、父なる神様とイエス様を知る事がなければ、それは空しいばかりです。 ここでの**知る**は知識として知ると言うのではなくて、
『人格的に知って、全信頼を寄せる』
と言う意味です。

唯一の真の神様が、どう言うお方か、ヨハネは3章16節で、
「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。 独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」
と言っています。 唯一の真の神様は、独り子を、この世に、お与えになることによって、御自身を示されました。 その事は、
『独り子を知ること無しに、唯一の真の神様は解らない。』
と言う事です。 独り子イエス・キリストは、人類の神様への叛きの罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かって罪を償い、人類が払い得ない罪の負債を贖われるのです。

そこに人類の罪は解決します。 断絶していた神様への道が拓かれます。 そして神様は、そこに全ての人を招かれます。 しかし、人間はなお、罪の性質を持っています。 そのために尚も自分に固執する人は、神様も御子イエス・キリストも信じません。 そして天国への道に来ようとはしないのです。 イエス様を知る、つまり、人格的に体験的にイエス様を知って、全信頼し、信じて、賭ける人だけが、イエス様による贖いの門を通って天国への道に入って行くのです。
永遠の命とはこの様に、唯一のまことの神様と、その神様の御心を現された イエス・キリストを知る事に掛かって居ます。

そこで、イエス様は御自身を信じる者に、永遠の命を与えるために、4節で、
「わたしは、行うようにとあなたが与えて下さった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」
と言っておられます。 イエス様は何を神様の栄光とお考えだったでしょうか。 神の栄光とは、神様が最も神様として、力を輝かされる事ですが、神様は何とその事を、人類に救いをもたらす、御子イエス・キリストの十字架に置かれました。

イエス様は、十字架を前にして、その事が成就したことを先取りして、
「栄光を現しました」
と、ここで言っておられます。 それは、イエス様が、十字架の彼方を見ておられたからです。
5節に、
「父よ、今、御前でわたしに栄光を与えて下さい。 世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。」
と祈られて居ることから解ります。 十字架の苦しみの彼方に、霊の体への復活があり、昇天して、永遠の世界に戻られ、神様の右の座に着かれると、世界が造られる前に持っておられた、神の御子の栄光をお受けになるのです。

しかし、イエス様はここで、そのように御自身だけのことを考えておられたのではありませんでした。 6節から19節までは、弟子たちのための執り成しの祈りが献げられて居ます。 弟子たちのこれからの使命は何でしょうか。 17節に、
「真理によって、彼らを聖なる者として下さい。あなたの御言葉は真理です。 わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。」
と言われているように、弟子たちの**使命**はイエス様に遣わされて、十字架、復活、昇天の**証人**となって、永遠の命の**福音を宣べ伝えていく**ことです。 そのために起こって来る様々な**困難、試練から**、彼らが**守られる事**を、イエス様は父なる神様に祈って下さいました。

そして、20節からは、
「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願

いします。」
とそこには、代々にイエス・キリストを信じる人々、つまり、私達キリスト者のためにも、イエス様は十字架を前に、執り成しの祈りをして下さっています。 何と言う深い愛でしょうか。 では、わたしたちの為に、どんなことを祈って下さっているのでしょうか。 21節に、

「**父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。 彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。**」

と祈って下さっています。 イエス様はすでに、14章11節で、弟子たちに、

「**わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うことを信じなさい。**」

と言われました。 この事を、**霊的な相互浸透**と言います。

父なる神様、子なる神様、共にそれぞれの人格をお持ちです。 神様の場合は、**位格**と言います。働きは違っておられますが、三位一体となって、御心を一つにして、同じ思いを持って、御計画を進めておられるのです。 詳訳聖書では、

「**父よ、あなたがわたしの内におられ、そして、わたしがあなたの内におりますのと、丁度同じように、彼らが皆、一つとなりますように。**」

と訳されています。
救われた罪人である、私達は、

『イエス様を信じている。』

と告白していながら、自分の我に、支配されると、キリスト者同士であっても、一致出来ないと言う弱さを抱えています。 とても、とても・・・父なる神様と御子イエス様の一致に倣うなど、不可能に思えます。

ところが、続いて祈られている言葉は、

『彼らも、わたしたちの内で、一つとなるためです。』

と言っておられます。 つまり、イエス様は、私達が、

『**自分達の努力**で**一つになる事**は**出来ない**』

事を、ご存知なのです。
ですから、イエス様は、

『御自身を**信じた者**を、聖霊によって、**御自身に結び**付ける事によって、父なる神様と御自身が一つであられる、その**交わりの中に引き入れて下さる**』

と言うのです。 その様にして引き入れられ、

『イエス・キリストに結ばれた交わりに依って、**キリスト者も、一つになる事が可能**となるのです。』

そこでは、イエス・キリストが中心で、キリストに繋がった交わりと、働きが成される時に、世は**キリスト者を見て**、イエス・キリストが**解り**、神様が**イエス・キリストをこの世にお遣わしになった事が確信出来る**でしょう。

イエス様は、御自身を信じる者が、ひたすら御自身に似る者となることを、求めておられます。では、この時、具体的に何が求められたのでしょうか。 22節に、

「**あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。**」

と言っておられます。私達は栄光と言う言葉に

『素晴らしい、輝かしいこと』

を想像します。確かにイエス様御自身、5節で、

「**世界が造られる前に、わたしが御許で持っていたあの栄光を**」

と、その輝かしい栄光を求めておられますが、イエス様がこの地上で、人の子となって受けられる栄光は、神様の救いの御計画が成就する、十字架なのです。
イエス様はルカ福音書9章23節で、

「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。**」

と神様の真理を語られました。

御国の栄光は、

『地上で、十字架の栄光を負って初めて、与えられるものである』

と言う事が解ります。 キリスト者の交わりは、
『イエス様の十字架に、
一つにされて行くものだ』
と言うことが解ります。 そこに神様の奥義が現わされるのです。 23節に、

「わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。 こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。」

と祈っておられます。

イエス様は天に帰られてからも、聖霊によってキリスト者の交わりの中におられるのです。
『イエス様がおられると言うことは、イエス様と共におられる父なる神様も、共におられる』
と言うことです。 三位一体の神様が働かれるところ、そこに一致の霊が注がれます。 一致の霊の中身は何でしょうか。 それは愛です。
神様の愛について、ヨハネは3章16節に、

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。 独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

と言っています。

そこでキリスト者は、この事を世に知らしめるために、一つになるのです。 そのためには、十字架を負うことにもなるのです。 しかし、イエス様は既に、16章で、悲しみが喜びに変わる事を約束して下さいました。 そして、イエス様の私達のための最後の祈りは、24節の、

「父よ、わたしに与えて下さった人々を、わたしのいる所に、共におらせて下さい。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えて下さったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。」

と祈られました。

ここに、イエス様ははっきりと、**御自身を信じる者**を永遠の御国へ、**御自身のもとに迎え**て、**永遠にその愛から離される事は無い**ことを、約束して下さっています。 イエス様は、天の御国へ帰られますが、地上で御自身を信じ、従うキリスト者達を、置き去りにされるのではありません。 26節に、

「わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。 わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。」

と祈って下さっています。

父なる神様は、御子イエス様が祈られた通り、今も生きて、聖霊を通して、イエス様と共に教会の交わりの中心に居られ、ご自身の愛を注ぎ続けて下さっています。 私達はこの事を信じ、キリストにある愛の一致に生きて、十字架を負うことを恐れず、永遠の命に至る、イエス・キリストの十字架の福音を宣べ伝えて参りましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

イエス様は、苦しみの十字架を目前にしながら、弟子たちのため、わたしたち代々のキリスト者のために、父なる神様に、執り成しの祈りを献げて下さり、有難うございます。

呉教会の一人ひとりが、父なる神様と、御子イエス様との深い愛に答えて、イエス様に繋がり、一致して、互いに祈り、助け合い、イエス・キリストの十字架の福音を宣べ伝えていく者とならせてください。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。